

ものもらい 症状2種類

「麦粒腫」＝細菌原因、まぶたにうみ

「霰粒腫」＝脂がたまり、長引く傾向



麦粒腫（左）と霰粒腫の症例

ものもらいは、炎症などでまぶたが腫れ上がる病気で、まぶたにうみがたまる「麦粒腫」と、脂がたまる「霰粒腫」の2種類がある。見た目は似ているが治療法

は全く異なるため、きちんと診断を受けた上で、適切に対処することが重要だ。伊藤医院（さいたま市）の有田玲子医師に、治療法や生活上の注意点について聞いた。

麦粒腫は細菌の感染が原因。まぶたが化膿して赤く腫れ、痛みが生じる。「感染が原因といっても人につることはなく、適切に対処すれば長引くことはありません」と有田医師。抗生物質の点眼や眼軟こうの塗布によって炎症を抑える治療がメインで、通常は1週間から10日程度で軽快していく。眼帯は、菌の繁殖を促すので使用しない。再発を繰り返す場合は、免疫力が低下している恐れがある。「よくあるのが、

花粉症ともものもらいを併発するケース。アレルギーによる免疫力低下が原因です」と有田医師。「そもそも麦粒腫は、体のあちこちに存在しているブドウ球菌が主な原因。体が弱っていると、普段は人の健康を脅かすことのない細菌にまで感染してしまうのです。大切なのは、まぶたを清潔に保ち、疲労やストレスをためないこと」

一方、脂を分泌するマイボーム腺が詰まる霰粒腫は治療が長引く傾向があり、治るまでに数カ月を要することが多い。基本的に痛みはないが、冷えによる血行不良や食事で油を大量に摂取した影響などで細菌感染を合併した「化膿性霰粒腫」になると、痛みが生じる。

目薬では治せず、手術という選択肢もあるが、最近ではまぶたを温めて詰まった脂を溶かす「温あん法」が主流。問題は、霰粒腫がドライアイのリスクを高め

てしまうこと。「マイボーム腺から分泌される脂には、涙の蒸発を防ぐ作用があります。ところが、霰粒腫を繰り返すとマイボーム腺の機能が低下し、潤いに必要な脂が不足してしまうのです」

いずれのものもらいも、予防にはまぶたを洗うことと、温あん法が有効だ。有田医師は「特に雑菌の多いまぶたの際を、朝晩しっかりと洗うこと。アイメークは、マイボーム腺をふさいでしまうのでお勧めできません。温あん法は血流を促してくれますが、炎症を起しているときは控えましょう」とアドバイスしている。